opusdei.org

黙想:神のお告げ (祭日、3月25日)

黙想のテーマ:「神は私たちを神化される」「イエスの生活を観想する」「とても人間的な神性」

神は私たちを神化される

イエスの生活を観想する

とても人間的な神性

「言(ことば)は肉となって、わた したちの間に宿られた。わたしたち はその栄光を見た」(ヨハネ1・14)。神のお告げの祭日に、これたことによって示されることによびたたれるであることを喜びたれるがあられるであり人間であり、他のでは、私たちのの人間のおいです。としている。また全人類のお祝いです。なたちの人間でありのがは、私にものお祝いです。というです。というです。というです。

今日の祝日は私たちに、人となられた神のみことば・イエスに注目するよう促します。「完全な神であると同時に骨肉を備えた完全な人間であるで変があることを私が決して疑わぬよして疑わなよりで変がしてい変をとって下さった」 図表をといるであるとを私が自らを空しくとといる。であるとなりでは驚きを隠せません。であてはない。であるとないない。

り、私たちの心に平和をもたらす無限の源泉です。「神はわたしたちの弱さに近づき、触れるために、ご自身も弱くなられた」図。

また、神が人間になられたのは、私 たちの生活のあらゆる面が神化され るよう、主にお任せする事への招き でもあります。ミサ聖祭の初めに、 この変容が私たちの内に実現される よう、大胆にも主にお願いします。 「救い主イエス・キリストが、人と なられた神であることを信じるわた したちが、神のいのちに与ることが できますように | 131。 受肉の神秘 は、私たち人間には、それ自体善で ある人間性を遥かに超える広がりの あること、また超自然的に生き、は かないものを超えて愛することがで きることをも示しています。それ は、私たちに似ているキリストを通 して、神から与えられる力です。

「おめでとう、恵まれた方。主があれたと共におられる」(ルカ1・28)。 は誕生のはこれではいからまれてで、の親密を与えられてで、を与えらないののののでは、でいるとのののでは、でいるとのでは、ではないないのでは、とで、全極しました。多くのは、という。

聖マリアの体験が、誰の追随も許さないことは確かです。誰もマリアたは確かでイエスと結ばれたことにながらないません。していませんのできることがきなで見ることが見ることを、信仰の目で見ることが認知しているとは、聖マリアが熟知して、まるとは、聖マリアがあれるしていたとい方法です。「水が流れ去る」をはい方法です。「水が流れ去る」をはいたというにはいいたというにはいいた。「水が流れまる」をはい方法です。「水が流れまる」をはいたというにはいいたというにはいいた。

うに福音書を読むのではなく、聖母 が御子のご様子を見つめられたよう な読み方をすることです。「キリス トのご生涯についてはよく知ってお かねばならないからです。それも すっかり心に刻みつける必要がある のです。どんな時でも、書物に頼ら ずに、ただ眼を閉じるだけで映画で も見ているかのように、主のご生涯 を思い浮かべることができるためで す。そうすれば、私たちは生活のど のような場にあっても、主のみ言葉 やみ業を思い浮かべることができる からですした。

カテキズムは、メシアの在り方をこのように眺める時に生じる変化を次のように説明しています。「念禱とは、イエスへと注ぐ信仰のまなざしです。聖なる主任司祭がいたころ、聖櫃の前で祈っていたアルスの農力にしなあの方を見つめ、ます。と話していました。(…)イエスのと言していました。(…)イエスの

まなざしが心を浄めてくれます。イ エスのまなざしの光はわたしたを シームの目を照らし、あらりにとなる 自分のあわれみとに照らして 自分のあわれみとに照らして いる二人のように、多言はなし 会です。私たちを包み込む偉大で十 です。 と忠実を確信して眺めるだけです。

主への信頼をこめたこの祈りの時 に、日々の闘いの助けになる多できる 振る舞いや言葉を学ぶことがにとがにとがにとがにとがにというを観想を一つにする す。神愛と人間的な愛を一切は、キリスト者としての品格をリスト者としての品格をリストはに、人間キリストの品格であるためには、人間的な事柄 神に仕えるためには、人間的な事柄 を大切にすることから始めなければ なりません」でと言っていました。 神のお告げの祭日は、神が天ことに を、思い出させてくれます。 は、神が非常に大間的であらています。 は、神がまずに大間的であらて は、を とたちと細やかに接し、 たちと細やかに されたりに でいましておられました。

真の人間キリストを観想することは、単に祈りだけではなく、仕えるというキリスト者としての使命をも豊かなものにします。主は、声と手で癒し、祝福し、十字架を抱えるため両腕を広げ、全身を通して、物理的にも私たちに尽くしてください、実際に働かれたのです。

「神のこのような行動様式は、わた したちが自らの信仰の現実について 問いかけるよう強く促します。わた したちの信仰は、感覚や感情の次元にとどまってはなりません。むしろそれは、具体的な生活の中に入っていかなければなりません」「®」。イエスは全生活をいけにえとして御父に捧げました。地上での歩みの各瞬間を奉献されたのです。これは聖母にも当てはまることで、お告げの日のfiatで神の約束を信じました。「その約束はすべての事柄を刷新する唯一の力」「®」です。

[1] 聖ホセマリア『神の朋友』201 番。

[2] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2021年1月3日。

[3] ローマミサ典書、神のお告げの 祭日の集会祈願。

- [4] 聖ホセマリア、団らん、1971年1 月2日。
- [5] 聖ホセマリア『知識の香り』107番。
- <u>[6]</u> カトリック教会のカテキズム、 2715番。
- [7] 聖ホセマリア『知識の香』172 番。
- [8] ベネディクト十六世、一般謁見 演説、2013年1月9日。
- [9] フランシスコ、演説、2019年1月26日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-shukujitsu-otsuge/(2025/12/15)